慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	2010年度プロジェクト科目報告会 (2月7日 三田キャンパス大学院校舎325B)
Sub Title	Oral presentations by graduate students in project course 2010
Author	桃生, 朋子(Mono, Tomoko)
Publisher	慶應義塾大学グローバルCOEプログラム論理と感性の先端的教育研究拠点
Publication year	2011
Jtitle	Newsletter Vol.15, (2011. 3) ,p.4- 4
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	
Genre	Research Paper
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=KO12002003-00000015-0041

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

2010年度プロジェクト科目報告会

Oral Presentations by Graduate Students in Project Course 2010

（2月7日 三田キャンパス大学院校舎325B）

2011年2月7日（月）、2010年度プロジェクト科目報告会が行われた。まず慶應人文グローバルCOE拠点リーダーの渡辺茂教授より挨拶があり、その後、それぞれのプロジェクト履修者から報告があった。まずプロジェクトAの松田壮一郎氏（タイトル：Mechanisms of limitation-a near infrared spectroscopy (NIRS)study-）、佐藤有理氏（タイトル：オイラー図・ヴェン図を用いた図形推論のfMRI研究）、玉田圭作氏（タイトル：我々はどうマンガを読んでいるのか？ -4コママンガ読解時の眼球運動を通じて-）より報告があった。次にプロジェクトCの吉原友美氏・永井敦氏・桃生朋子氏（タイトル：日本語形容動詞における空コピュラ「∅」）より報告があり、休憩を挟んでプロジェクトDの山根千明氏（タイトル：会が印象における明暗コントラストと違和感）、大沼麻実氏（タイトル：アルコール依存者をAAへとつなげる中間施設マックのプログラム）の報告があった。最後にプロジェクトEの北村直彰氏（タイトル：Supersubstantivalismの検討 - 形式的存在論的観点から -）より報告があった。報告終了後、それぞれのプロジェクト責任者から講評が述べられた。その後、社会学研究科委員長の杉浦章介教授より挨拶があり、最後に杉浦教授より履修者に修了証が授与された。

プロジェクト科目の目的は、分野の垣根を越えた議論を実現することにより、自身の研究のさらなる発展を促すところにある。この目的を果たす過程で生まれる利点は多々あり、例えば様々な視点を融合させることで、新たな興味深い視点を生みだす点、自身の研究を客観的に見直せる点がある。特に後者は重要かつ見落としがちな点であり、今回の報告会を通し、その重要性に改めて気付かされた。（桃生朋子）

A debriefing session for “Project Course 2010” was held on the 7th of February, 2011. After seven oral reports of multi-disciplinary topics, each student was awarded a certificate of completion.

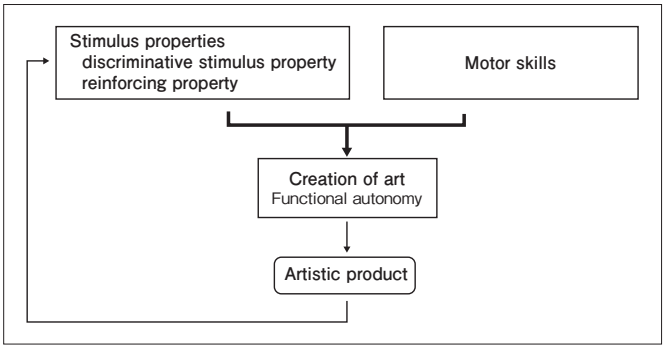
Le Plaisir du beau

—— 美の快楽 ——

（2月13−14日　パリ第10大学）

2011年1月13、14日にパリ第10大学（Nanterre）において表記シンポジウムが行われた。ま、極めてフランス的なテーマというべきか。このシンポジウムは一般公開されず、ごく少数の研究者のみによる討論に十分時間をかける形式でおこなわれた。Nanterre大学はパリ中心から30分程度の所の新興地区であるNanterre La Defenceにある比較的新しい大学で、Kreutzer教授率いる動物行動学の大きな研究室があり、今回のシンポジウムは哲学者であるHoquet教授とKreutzer教授が全体の統括を行った。講演者は哲学者、科学史研究者、動物行動学者、分子生物学者、心理学者、神経科学者、文化人類学者など多岐にわたる。シンポジウムの副題は「ヒトと動物における美的感覚と性選択」となっており、進化美学がひとつの中心テーマであった。僕は「動物美学」というタイトルで、美の弁別刺激効果、強化効果、運動技能という話をし、最後に美の創造という話をした。創造においては、動物に絵を描かすことはできるが、それが機能的自律性(functional autonomy)を持っているか、また作品が強化効果を持ち得るかという点が重要になる。話が噛み合ないのではないかと心配していたが、意外に密度のある討論ができた。これはフランスの研究者がそれぞれかなりの教養を身につけているからであって、先端的な研究はしていてもちょっと離れた話になると全くついてこられない米国式の研究者との大きな違いであろう。僕は個人的にはどちらかというとドイツ文化に馴染んできたが、一昨年にエコル・ノルマルで講義をしてからフランス式の知性の在り方にも興趣を覚えるようになった。今後、若手研究者が海外連携拠点との交流を利用して多様な知の在り方にも目を向けてもらえればと思う。（渡辺茂）

A symposium entitled “Le Plasir du beau” (The pleasure of beauty) was held at Nanterre, France. Topics such as aesthetic senses and sexual selection were discussed from diverse perspectives.



美的刺激は弁別刺激効果と強化効果を有する必要がある。美の創出にはさらに運動技能が必要になり、この製作活動が自律的に、すなわち、他の餌強化などではなく自己強化によって維持されなくてはならない。最終的には、作成された物が自分や他の同種他個体にとって美的刺激としての性質を持たなくてはならない。この最終段階はヒト固有と考えられる。